

趣旨と総括

頼 住 光 子

まず、比較思想学会第四八回大会シンポジウム「運命と偶然」の冒頭で読み上げた趣旨文の骨子を、以下に示しておこう。

現代は不確実性の時代と言われているが、二〇二〇年から続く新型コロナウイルス感染症の世界規模の拡大とそれにもなう社会的な、また心理的な混乱によって、不確実の様相はますます強まっている。どこでどう感染するか分からないという恐怖の中で、人々は、自分たちは偶然の連続の中で生きているということを改めて実感し、また、自分たちは見通すことなど出来ない運命に翻弄されるだけの果敢無い存在に過ぎないという感慨を持つ。今ほど、「運命」や「偶然」という事柄が身に染みて迫ってくる時代はないと言ってもいいだろう。

さて、西洋近代哲学の歴史を振り返って見ると、いくつかの例外を除き、基本的に「運命」や「偶然」については主題化しないという著しい傾向が見受けられる。たとえばスピノザは「ある物が偶然と呼ばれるのは、われわれの認識に欠陥があるからにすぎ

ないのであって、それ以外のいかなる理由によるものでもない」（『エチカ』）と述べ、ヘーゲルも「哲学的考察は偶然的なものを排除するという以外の意図はもたない」（『世界史の哲学についての講義』）と述べ、「偶然」というものは、合理性を重んじる哲学の中では居場所を持たせてはならない、追放すべき疑念的な概念であることが宣言される。つまり、われわれが理性を正しく十全に働かせることができるならば、あらゆる事象は必然性を持ったものの、有意義なものとして立ち現われるはずだ、というのが理性を重んじる西洋近代哲学の基本姿勢なのである。

また、近代哲学の祖とされるデカルトは、事物事象を完全に数学的に規定可能な量に還元し、靈魂や神といった作用因（中世のスコラ哲学においては実体形相でもあった）を想定することを否定し、存在を機械論的な因果関係の下にあるものとして理解した。デカルト的思惟に基づいても、「運命」や「偶然」という概念は排除されるべき疑念的なものとなるだろう。

しかし、世界のさまざまな思潮に眼を向けて見るならば、このような合理性尊重の下での「運命」や「偶然」のひたすらな排除とは違う、さまざまな「運命」や「偶然」に対する考え方があることが分かる。西洋近代においてすらも、たとえば、ショーペンハウアーの「超越論的な宿命論」やニーチェの「運命愛」などが挙げられようし、日本の九鬼周造は「偶然性」に関して透徹した思索を行った。また、現代の分析哲学においても「運」は重要なトピックになっている。さらに広く眼を向ければ、ギリシアにおける運命に関する思想、中国における天命概念、仏教における因果論など、「運命」「偶然」の問題を考えるための豊かな手がかりが、さまざまな思想圏に見出せる。本シンポジウムは、この問題を、四人の会員による提題に基づき検討することを目指す。

本シンポジウムを通して、最も強く感じたことが、「偶然」「運命」という事柄の捉え方が持つ、含意と示唆の重要性である。ある事柄をわれわれが「偶然」のものとしたり、「運命」と捉えたりするのは、安定的な日常性が脅かされる「出来事」が起こった場合であろう。その「出来事」によって露呈する世界の根源的な不安定性と無根拠性と無意味性。そして、そのことから照らし出されるわれわれ自身の「生」の不安定性と無根拠性と無意味性。これらをどう理解し、どう対応しつつ、われわれが自らの「生」を引き受けていくのか、そのことを考える手掛かりを各提題から探ってみた。

納富信留氏の所論によれば、古典期のギリシアでは、基本的に「不死なる神は、すべての成り行きを必然性の下に把握できるが、

死すべき人間にはそれは不可能である」と考えられていたという。そのような世界の偶然性に、わが身を晒された人間は、その出来事を自ら「運」「運命」として受け容れ、それとともに、成り行きを見通すことのできなかつた自らの有限性を深く自覚するべきだとされた。このことを端的に表す人間像が、ギリシア悲劇のオイディプス王である。スフィンクスを退治してテーバイの王位に就き、死去した前王ライオスの妃イオカステを娶った英雄は、実は、すでにアポロンの神託が告げていたように、何も知らないままに、自分の実の父親（前王）を殺し、実の母親（前王の妃）を娶り子までなしてしまっていた。最後に、すべてが明らかになった時に、自らの両眼を針で突いて失明し、テーバイを去るオイディプスの姿からは、運命に抗いつつも（オイディプスは、アポロンの神託が成就しないように行動し続けた）、最後には運命を受け入れ、人間としての分を弁える生き方を見て取ることができる。ここでは、自らの有限性の自覚が、無限なるものへの気付きと信頼を導き出したと言えるのではないだろうか。納富氏が紹介したアリストテレスの詩学におけるオイディプス解釈の論点である「逆転を通じての再認」、すなわち「不運な偶然の出来事による幸福から不幸への没落」を通じての「有限な人間の目からは偶然と見えた出来事が神の目からは必然であったことの自覚」は、まさにこのことに深くかかわっているだろう。

そして、納富氏が説明したソクラテスの生き方も、このような運命を受け入れるものとして理解できる。幸運と（徳による）幸福とを峻別し、死刑によってさえも、無知の自覚の下でひたすら

に愛知としての哲学を極めた自己の幸福は揺るがないというのが、ソクラテスの考えであった。日常生活の安定性を脅かすどのような出来事も、神への信頼に基づく、ソクラテスの知の探究を無意味化したり、無根拠化したりすることはできなかったのだ。

上述のような古代ギリシアの「運」や「運命」の考え方は、ある意味で対照的なのが、古田徹也氏の紹介するリベラル・アイロニストとしてのリチャード・ローティのそれである。プラグマティズムの系譜を引くローティによれば、いついかなる場合でも妥当する普遍的な客観的実在としての真理や、実在を再現する言語などはなく、自分にとって最も重要な信念ですらも、偶然的なもの、歴史的なものであり、また、言語は再現するものではなく創造するものであり、このような捉え方をする人がアイロニストなのである。さらに、ローティは、他者の私的生活の自由な多様性を認めるという意味でリベラリストでもある。そして、リベラル・アイロニストは、「自由を守る」という価値にコミットしつつ、その価値自体、そして自らのコミットメントそのものが偶然性、歴史性を免れられないことを心に刻み付けなければならない。このような、ローティの主張に対しては、相対主義だとされ、相対主義に対するお決まりの批判が投げかけられるかもしれない。それは、相対主義の主張それ自身が絶対化されてしまっているのではないかというものである。それに対して、ローティは、あらゆる主張の外側に立ってそれらを見渡すことはできず、従って、われわれにできるのは、ただ、「今、ここ」において、自らがすでに巻き込まれている特定の文化や言語、組織に対して、距離を取りつつ

新たな概念や語彙を創造し続けることだとする。そして、それが「文化政治」として、哲学者が追求すべき営みなのである。

このような偶然性を織り込んだ「生」を真剣に生きる姿勢は、ローティの批判者であるトマス・ネーゲルも同じく高く評価するものである。ネーゲルは、ローティの「文化政治」を批判して、哲学とは「文化以前」「言語以前」を言語によって表現する営みであるとするが、しかし、自分が特定の価値や意味にコミットメントしつつも、それらの偶然性、歴史性を自覚すべきという主張において、ローティと軌を一にするのである。現代の哲学の目立った傾向として、近代哲学が無視してきた偶然性に改めて目を向け、それを人間存在の重要な成立契機とすることによって、決定論的に安定した日常性に揺さぶりをかけつつ、新たな価値や意味の創造を主張する傾向を認めることができるだろう。

偶然性を排除した西洋近代哲学以前の古典期ギリシア哲学、そして、その後の現代哲学のローティやネーゲルにおいて、「運」「運命」「偶然性」という相互に関連するひとまとまりの問題群が、それぞれの哲学的営為の中心に位置することをこれまで見てきた。次に東洋に目を転じてみよう。

中島隆博氏は、九鬼周造の偶然性に関する議論の中で、真の偶然性とは、未来において不可能性が可能性にわずかながら接することであり、それは、文字通りに「有り難い」ものであり、このような可能性の未来の必然性への展開の中に「有限者の救い」があるとした論点に注目を促す。そして、九鬼が、この世界の形而上学的偶然性に着目し、純粹な偶然論は、非キリスト教圏のギリ

シア哲学や東洋哲学に見出されるとしたことを指摘し、その上で九鬼自身が「純粹な偶然論」とした王充の議論を再検討する。

後漢の王充は、前漢の董仲舒に代表される天人相関論を否定し、現実を「氣」によって内在的に理解した。このような理解は、(九鬼の純粹な偶然論との指摘とは対照的に) 必然的に決定論、運命論を導き出す。ただし、王充は、「氣」による決定論、すなわち「運命」に支配される一般人と、天の性をうけた聖賢とを峻別した上で、聖賢の出現は、驚異であり「偶然」であることを強調する。「運命」による決定論を突き詰めていってもそれを貫徹することはできず、世界はその成り立ちからして原初的な偶然性を免れられない。その偶然性は、聖賢の出現という出来事において自らを表現する。このことを私なりに解釈するならば、日常世界は日常世界としてのみ自立することはできず、つまり、全ての事柄が決定されたものとして安定することはできず、その破れ目が「偶然性」として立ち現われ、日常世界をある意味で超越した聖賢が出現し、日常世界の存立を保証するということになるうか。

ラジ・シュタイネック氏は、道元の「有時」の時間論を、哲学的、形而上学的な「時間とは何か」という問いに基づくものではなくて、修証二等を支える時間論であると規定した上で、道元の時間論の背後には、明示的ではないものの「運命」や「偶然性」という問題群が控えていると述べる。

道元は、その天然外道批判、自然外道批判において、聖なる永遠の涅槃の世界と迷いと苦しみの世界とを峻別した上で生きとし生けるものは仏性(仏の本質)を内在させているからいずれは迷

苦の世界を脱して開悟成道して涅槃の聖なる世界に到達できるとするような考え方を厳しく否定する。それは、迷苦の世界を偶然のもの、不可避の運命と捉える考え方の否定であるとともに、今、ここでの修行が、今、ここでの悟りを実現しているという修行における「今」、すなわち「而今」を重視する時間論に基づく主張でもある。この「而今」とは、あらゆる時間をそれ自身に内包するような「現在」であり、道元にとって、修証一等の成就する時間は、流れ去るものではなくて、このような「而今」の連なりとして理解される。このように道元は、修証一等の立場から自己とは無関係に一方に流れる時間を前提とした「運命」や「偶然性」という問題群を否定したと言えるのである。

以上の四本の発表は、ギリシア思想、現代思想、中国思想、日本思想と、時代も地域も大きく異なる思想に基づくものである。そこでは、運命や偶然との出会いの中に人間の有限性が見てとられ、また、偶然性や運こそが人間の実践を考える重要な契機とされ、さらには、因果の必然性の彼方に偶然性が要請された。偶然性や運命という考え方が流れ去る時間を前提した上で成立していることを指摘した上で、いわば「永遠の今」の実践論が説かれもした。それぞれの思想圏の人間存在や世界構造の捉え方を反映して、運命や偶然性へのアプローチも多様なものとなっているが、そこには、等しく、自己と世界、内在と超越、有限と無限との接点を厳しく見つめ掘り下げる営為があったと言える。

(よりずみ・みつこ、日本倫理思想史・比較思想、
東京大学大学院教授)